2023 年度成人科テキスト

# 「聖書日課と分かち合い」　４月号

名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

## お知らせ

- ✧ 毎週、成人科を行っています。ぜひご出席ください。
  **１０：１５～１０：５０**　**地下フェロシップホールにて**
- ✧ 「聖書教育」誌の購読をお勧めしています。このテキストと併せて、ぜひお読みください。ご希望の方は事務室までお知らせください。
- ✧ このテキストのボックスへの配布をご希望される方は、担当者（岩崎秀子姉、宇佐美典子姉、郷健人兄）までお知らせください。

## 2023 年度奉仕者ご紹介

聖書日課担当

**宇佐美典子姉**
ヒマラヤを訪れる登山家たちをガイドするシェルパと呼ばれる人たちがいます。登山家たちが安全に山に入れるよう荷物運びや案内をします。私も、成人科の学びと交わりへと、みなさまをご案内するシェルパになりたいと思います。

**小沢敬一兄**
コメントやショートメッセージを読み、気づかされる事が多々あります。感謝です。「聖書日課と分かち合い」を日々読み、私も皆様も共に(神さま　イエスさまを賛美)信仰心 UP！致しましょう。

**栗山義亜兄**
どうコメントして良いのか難しい聖句もあり、色々調べたりと良い学びになっています。
皆で共有していきたいですね！

**渡部和子姉**
忘れていたことも思い出し、日々新たにさせていただき感謝です。
主のお力によって　少しでも皆さまのお心に届きますように・・・。

ショートメッセージ担当

**岩崎秀子姉**
リアルでの成人科が始まり、毎週充実した学びの時を過ごせることに感謝です。分かち合いでは、自由な感想、そして大切な証をしてくださることもあり、祝福を実感しています。

**郷健人兄**
じっくり御言葉に向き合いつつ、どんな分かち合いが出来るだろうとワクワクしながら原稿を書いています。そして当日は、いつも期待していた以上の学びと祝福をいただいています！

**郷秀男兄**
皆さんとの、み言葉の分かち合いが純粋に嬉しく楽しいです。

**田中由記子姉**
成人科のご奉仕を通して、豊かな学びと祝福をいただけることに感謝いたします。「わたし自身が書く」というよりも、「主によって書かせていただいている」といつも感じています。

# 第１課「今日わたしと一緒に楽園に」

聖書箇所：　ルカによる福音書 23 章 26―43 節
主題聖句：　イエスよ、あなたの御国においでになるときには、
わたしを思い出してください（23：42）

今週の聖書教育誌の週題は「今日わたしと一緒に楽園に」です。
イエスさまと共に十字架に架けられた犯罪人に向けて言われた言葉です。彼の人生の中で、恐らくはイエスさまの存在や言動は見聞きしていたのでしょう。神を神とも思わず、恐れずに悪事に手を染めてしまった彼の人生の最後の最後にイエスさまとの出会いが実現した事実を覚えたいと思います。

**ルカ 23:31**

**「『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」**

真の神の御子を十字架につけよとユダヤの民衆が叫び、ピラトやヘロデさえ死刑にあたる犯罪を何も認められないと宣言したのにも関わらず、大祭司や宗教指導者に扇動された民衆は大声で要求し続けました。御子イエスにさえこうされるのなら大祭司や宗教指導者にはどれほど恐ろしい仕打ちが父なる神から待っているだろうかと言われたのです。

**ルカ 23:28**

**イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。」**

イエスさまへの仕打ちのむごたらしさに嘆き悲しみ涙する女性たちに対して、これからあなたたちにはさらに恐ろしい出来事が起きようとしていることを語り告げられたのです。

それはユダヤ・エルサレムが神の招きを拒み続け、今このときイエスさまを十字架に架けることで徹底的に拒んだ故に神殿も町も破壊されて神の民であった筈のユダヤ社会が、民族が崩壊し散らされことを予見されていたのです。磔刑の聖書箇所の前に父なる神の怒りの有様を聴くことは意味のあることです。心に強く留める者でありたいと思わされました。

**ルカ 23:32**

**ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。**

イエスさまと共に二人の犯罪人が十字架に架けられました。イエスさまが三人の真ん中に右と左に、それぞれ犯罪人が架けられました。共に間もなく地上での命は絶えることでは同じ道をたどるとも言えますが、この二人には大きく異なることがありました。それは真ん中におられるイエスさまをののしっているか、そうではなくたしなめているかです。

十字架を見上げる者たちにも嘲る者と涙する者に分かれていました。

「**わたしと一緒に**」とイエスさまが十字架上で言われた時に、左の男と右の男の二人ともにではなくて、出会いが起きた男に対して「**あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる**」と言われたのです。

こんなにも近くにいながらイエスさまに真実の出会いが出来ていない男と、お会いすることが出来た男には、どのような違いがあるのでしょうか。

**ルカ 23:39**

**十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」**

一人はののしりの言葉をあびせます。救ってみろと言いつつ、私を救ってくださいという必死の願いではありません。お前は本当に神の御子なのか、お前をとおして生ける神が働かれているのか、ならば見せてくれ。そうすれば信じてやるという心持ちのようです。この言葉には、ある意味で私たちも共感してしまう誘惑にかられます。そのような目でイエスさまを見てしまう私があることを告白しなければなりません。自分の中で期待する神の姿を思い描いてしまい、それと異なるとなるといつでも私たちは神を侮り忘れる者になることを自戒しなければならないと思わされました。

そのような私たちにイエスさまは十字架の上で祈ってくださいました

**ルカ 23:34**

**そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」**

私たちはあまりに身勝手で自己中心に物事をとらえがちの存在ゆえに「自分が何をしているか」を見失うのです。十字架刑という当時、もっとも残酷な刑につけたのはユダヤの会衆であり、今を生きる私、そしてあなたなのです。そんな私たちのためにもイエスさまは和解のために執り成しの祈りをしてくださったのです。

**使徒言行録 3:17**

**ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分かっています。**

　十字架の出来事はあなたがたが無知なるが故に犯した罪であることを使徒ペトロは分かっていると語っています。無知の怖さ、悲しさを思い知ります。私たちは自分を省みて罪人という意識にはどこか乏しいのではないでしょうか。自分はそんな神の前に悪い事などしていない。どうしてわたしが罪人と言われなければならないのか。罪人であることの本当の怖さ、恐ろしさを知らず、神に甘えているのかもしれません。

その私たちが犯した取り返しがきかないような罪を神が慈愛をもって赦されるのだから私たちもまた恵みに与った者として違いを乗り越えて互いに赦し合うようにと十字架上で教えておられるのです。

**エフェソ 4:32**

**互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。**

十字架の上で、もう一人の犯罪人は神を畏れることを知っている人でした。神を畏れる人は神を信頼することが出来る人です。十字架に架けられ地上の命が絶たれようとしたとき、同じように十字架で痛み悶え苦しまれているイエスさまがおられる。この方には十字架に処せられる理由がないにも関わらず自分と同じように地上の命が絶えようとしている。けれども、間違いなく彼はこの時にイエスさまにお会いすることが出来たのです。

**ルカ 23:42**

**そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。**

イエスさまの前に誇ることなど何もない、悪事を重ねたことで裁きを受けている自分を受け入れている。自分は救われることはないと分かっているけれど、せめて自分のことをイエスさま、どうか忘れないで思い出してほしいと願いました。彼の最後の言葉でした。その言葉を聞いてイエスさまは言われました。

**ルカ 23:43**

**するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。**

あなたはすでに私と共にいる。あなたが私に「**思い出してください**」と言ったその一言だけで充分であると言ってくださったのではないでしょうか。キリストのもとに帰るのに遅すぎることはないのです。

～分かち合い～

✧ キリスト者であるあなたはご自分を神の前に罪人であると告白しました。その体験を思い起こしてみましょう。

✧ 「あなたがキリストを十字架につけたのですよ」厳しい言葉ですね。この言葉から皆さんの想いを分かち合ってみましょう。

（担当：郷　秀男）

# 4/2―8　今週の聖書日課

**4月2日（日）**

**ルカによる福音書 23 章 26-43 節**

26 人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を
背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。 27 民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエ
スに従った。 28 イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのため
に泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。 29 人々が、『子を産めない女、産んだこと
のない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。
30 そのとき、人々は山に向かっては、
『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言い、
丘に向かっては、
『我々を覆ってくれ』と言い始める。
31 『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」
32 ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。 33 「されこう
べ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人
は左に、十字架につけた。 34 〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分
が何をしているのか知らないのです。」〕人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。 35 民衆は
立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、
選ばれた者なら、自分を救うがよい。」 36 兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけなが
ら侮辱して、 37 言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」 38 イエスの頭の上には、
「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。
39 十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分
自身と我々を救ってみろ。」 40 すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、
同じ刑罰を受けているのに。 41 我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。
しかし、この方は何も悪いことをしていない。」 42 そして、「イエスよ、あなたの御国においでにな
るときには、わたしを思い出してください」と言った。 43 するとイエスは、「はっきり言っておくが、
あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

主イエスを嘲り蔑む人々のため、十字架上で父なる神に赦しを願い祈ります。これは長い苦しみの中で発せられた主の本心です。この一方的な完全な犠牲的な愛は群衆のためだけではなく、私たちのためであることを感謝を持って受け止め、主によって罪の赦しが与えられたことを喜ぶ人となりたいです。

**4月3日（月）**

**ルカによる福音書 22 章 31-34 節,39-45 節**

31 「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き
入れられた。 32 しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あ
なたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」 33 するとシモンは、「主よ、御一緒にな

ら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。 34 イエスは言われた。「ペトロ、
言っておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

39 イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。 40 いつもの
場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。 41 そして
自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。 42「父よ、御心なら、この
杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってくださ
い。」〔 43 すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。 44 イエスは苦しみもだえ、いよいよ
切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕 45 イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子た
ちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。

ペトロは主イエスを救い主と信じ従いますが、捕らえられ打たれ侮辱されみじめな弱々しい姿に失望します。そして「私はあの人を知らない」と言ってしまうのです。ペトロの姿は私たちの姿でもあります。ペトロの失敗から私たちは自らの心の最も深い部分を見つめ直し、主イエスの恵みを思い起こし私たちのために祈ってくださる主の御声に耳を傾けましょう。

**4月4日（火）**

**使徒言行録７章 51 節-8 章３節**

51 かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。
あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。 52 いったい、あなたがた
の先祖が迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを預
言した人々を殺しました。そして今や、あなたがたがその方を裏切る者、殺す者となった。 53 天使
たちを通して律法を受けた者なのに、それを守りませんでした。」
54 人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ぎしりした。 55 ステファノは聖霊に満たさ
れ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、 56「天が開いて、人の子が神の右
に立っておられるのが見える」と言った。 57 人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、 58 都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物を
サウロという若者の足もとに置いた。 59 人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、
「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。 60 それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を
彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。
1 サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。
その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方
に散って行った。 2 しかし、信仰深い人々がステファノを葬り、彼のことを思って大変悲しんだ。 3
一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。

石打ちの刑に処されたステファノは石を投げつけられる中で、天を見つめ主イエスを仰いでいました。「主よ私の霊をお受けください。…この罪を彼らに負わせないでください」と祈り、息を引き取りました。初代教会の最初の殉教者となったステファノは最後まで主の教えを守り抜いた敬虔な人でした。

**4月5日（水）**

**使徒言行録8章26-40節**

26 さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」
と言った。そこは寂しい道である。 27 フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王
カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来
て、 28 帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。 29 すると、“霊”
がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」と言った。 30 フィリポが走り寄ると、預言者
イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言っ
た。 31 宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗って
そばに座るようにフィリポに頼んだ。 32 彼が朗読していた聖書の個所はこれである。
「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。
毛を刈る者の前で黙している小羊のように、
口を開かない。
33 卑しめられて、その裁きも行われなかった。
だれが、その子孫について語れるだろう。
彼の命は地上から取り去られるからだ。」
34 宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているので
しょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」 35 そこで、フィリポは口を開き、
聖書のこの個所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。 36 道を進んで行くうちに、
彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあ
るでしょうか。」 37 † 38 そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、
フィリポは宦官に洗礼を授けた。 39 彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。
宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。 40 フィリポはアゾトに姿
を現した。そして、すべての町を巡りながら福音を告げ知らせ、カイサリアまで行った。

ステファノの殉教後、教会に対する迫害はさらに激しくなり、それにより使徒たちは地方へと散らされます。決して出会うはずのないフィリポとエチオピアの宦官、このふたりの不思議な出会いは神さまのご計画と言えます。イザヤ書を説き明かしバプテスマを受け、主からの祝福を受けたふたり（エクレシア）。フィリポがこの宦官の伴走者となったのです。

**4月6日（木）**

**ヨハネによる福音書20章24-29節**

24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかっ
た。 25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方
の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなけれ
ば、わたしは決して信じない。」 26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にい
た。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるよう
に」と言われた。 27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見な
さい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者に

なりなさい。」28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。 29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

主イエスの復活は信じがたい出来事です。「私たちは主を見た」という仲間の弟子たちを疑うトマス。トマスは弟子たちの証言だけでは主の復活を信じることができませんでしたが「見ずに信じる者は幸いです」と主イエスは語られます。神は見える形を持たない存在であり御子イエスを通してその人格を表されました。「私の主、私の神よ」というトマスの告白はイエスさまが神であることを証ししています。

**4月7日（金）**

**詩編 22 編 1-32 節**

1【指揮者によって。「暁の雌鹿」に合わせて。賛歌。ダビデの詩。】
2わたしの神よ、わたしの神よ
なぜわたしをお見捨てになるのか。
なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず
呻きも言葉も聞いてくださらないのか。
3わたしの神よ
昼は、呼び求めても答えてくださらない。
夜も、黙ることをお許しにならない。
4だがあなたは、聖所にいまし
イスラエルの賛美を受ける方。
5わたしたちの先祖はあなたに依り頼み
依り頼んで、救われて来た。
6助けを求めてあなたに叫び、救い出され
あなたに依り頼んで、裏切られたことはない。
7わたしは虫けら、とても人とはいえない。
人間の屑、民の恥。
8わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い
唇を突き出し、頭を振る。
9「主に頼んで救ってもらうがよい。
主が愛しておられるなら
助けてくださるだろう。」
10わたしを母の胎から取り出し
その乳房にゆだねてくださったのはあなたです。
11母がわたしをみごもったときから
わたしはあなたにすがってきました。
母の胎にあるときから、あなたはわたしの神。
12わたしを遠く離れないでください
苦難が近づき、助けてくれる者はいないのです。

13 雄牛が群がってわたしを囲み
バシャンの猛牛がわたしに迫る。
14 餌食を前にした獅子のようにうなり
牙をむいてわたしに襲いかかる者がいる。
15 わたしは水となって注ぎ出され
骨はことごとくはずれ
心は胸の中で蝋のように溶ける。
16 口は渇いて素焼きのかけらとなり
舌は上顎にはり付く。
あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる。
17 犬どもがわたしを取り囲み
さいなむ者が群がってわたしを囲み
獅子のようにわたしの手足を砕く。
18 骨が数えられる程になったわたしのからだを
彼らはさらしものにして眺め
19 わたしの着物を分け
衣を取ろうとしてくじを引く。
20 主よ、あなただけは
わたしを遠く離れないでください。
わたしの力の神よ
今すぐにわたしを助けてください。
21 わたしの魂を剣から救い出し
わたしの身を犬どもから救い出してください。
22 獅子の口、雄牛の角からわたしを救い
わたしに答えてください。
23 わたしは兄弟たちに御名を語り伝え
集会の中であなたを賛美します。
24 主を畏れる人々よ、主を賛美せよ。
ヤコブの子孫は皆、主に栄光を帰せよ。
イスラエルの子孫は皆、主を恐れよ。
25 主は貧しい人の苦しみを
決して侮らず、さげすまれません。
御顔を隠すことなく
助けを求める叫びを聞いてくださいます。
26 それゆえ、わたしは大いなる集会で
あなたに賛美をささげ
神を畏れる人々の前で満願の献げ物をささげます。
27 貧しい人は食べて満ち足り

主を尋ね求める人は主を賛美します。
いつまでも健やかな命が与えられますように。
28 地の果てまで
すべての人が主を認め、御もとに立ち帰り
国々の民が御前にひれ伏しますように。
29 王権は主にあり、主は国々を治められます。
30 命に溢れてこの地に住む者はことごとく
主にひれ伏し
塵に下った者もすべて御前に身を屈めます。
わたしの魂は必ず命を得
31-32 子孫は神に仕え
主のことを来るべき代に語り伝え
成し遂げてくださった恵みの御業を
民の末に告げ知らせるでしょう。

1～21 節は嘆きの言葉です。人から捨てられ、敵から嘲笑され、沈黙している神にひたすら依り頼んで「わたしの神、わたしの神」と叫び続けています。自分にはわからなくても神は完全な存在としておられるという確信が、22～32 節で主を讃える賛歌に変わります。大いなる集会で賛美を捧げ個人的な喜び・信仰が共同体の信仰となっていく、ダビデは主のすばらしさを歌い人々を礼拝へといざなっています。

**4月8日（土）**

**ルカによる福音書 23 章 50-56 節**

50 さて、ヨセフという議員がいたが、善良な正しい人で、51 同僚の決議や行動には同意しなかった。
ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいたのである。 52 この人がピラトのところに行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出て、 53 遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた。 54 その日は準備の日であり、安息日が始まろうとしていた。 55 イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスの遺体が納められている有様とを見届け、 56 家に帰って、香料と香油を準備した。

ヨセフ議員はおそらく大急ぎでピラトのところへ行きイエスの遺体を渡してくれるよう願い出たのでしょう。（死刑囚の遺体は共同の焼き場に投げ込まれるのが習わしだった）主に対する尊敬と信仰ゆえに勇気を出して行動し、女性たちが準備した香料と香油を用い、新しいお墓に丁寧に葬ってあげたいという思いは、この方こそ神の子であるという確信があったからです。

（担当：宇佐美　典子）

## 第２課「エマオの途上で」

聖書箇所：　ルカによる福音書 24 章 13―35 節
主題聖句：　二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

金曜日に十字架で息を引き取られたイエスさまは、3 日目の日曜日の朝、復活されました。私たちが日曜日を“主日”と呼び、礼拝する日として大切にする理由はここにあります。4/9 はイースター当日ですから、主の復活へ特に深く思いを馳せますが、毎週の主日礼拝でも同じように復活の喜び、希望を思い起こし、それによって自分自身が新たにされていきたいと願います。

今日の箇所は正に、復活によって新たにされた 2 人の弟子の話です。

この 2 人の弟子は、当日朝にマグダラのマリアたちが墓で経験した出来事を既に知っていました。マリアたちは「墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。(12：9)」とありますので、この時に聞いたのでしょう。また 2 人の弟子も、自分たちが経験したことを「十一人」や仲間たちに伝えているので、彼らとの関係は深く、熱心な弟子であったことが想像できます。

その弟子たちをしても、イエスさまがどのようなお方であるかの理解は不十分でした。イエスさまのことを「行いにも言葉にも力のある預言者」と表現し、「あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました」とも語っています。イエスさまを神の子ではなく人間と見なし、抑圧されたイスラエル民族の指導者として期待をかけていたことが分かります。エルサレム入城の際に歓声をあげていた民衆と大差はありません。

マグダラのマリアたちがイエスさまの復活を告げたことについても「婦人たちがわたしたちを驚かせました」と表現しているので、信じ切ってはいません。2 人は道すがら、このことについて論じあっていたようですが、復活を前提とした議論ではなく、なぜイエスさまの遺体が亡くなったのか、人間的な推理に終始していたのではないでしょうか。

イエスさまは、そんな 2 人のところにまずお姿を見せられました。「十一人」やマグダラのマリアのように福音書の中でもよく知られた人々ではなく、この箇所以外では特に出てこない 2 人のところです。イエスさま誕生のお告げがまず羊飼い達に成されたのと同じように、人の思いを超えた主の選びを感じます。

先述したような 2 人の不信仰ゆえにイエスさまは嘆かれました。しかし、そこで終わらず聖書の解き明かしをしてくださるのがイエスさまの優しさです。この時 2 人は知らない男の人が話しかけてきた、と思っているわけですから、イエスさまも「私について聖書には…」という話し方ではなく、「そのイエスという人についてはこう預言されてましたよね」といった風に話されたのでしょう。一見回りくどいようですが、2 人にとってはこうすることが

一番良い、とお考えになったのです。

実際この２人は、目が遮られている状態から、開かれる出来事を経験したことで、大きな感動と喜びを覚え、人々にそれを伝える者となりました。つまり、本当の意味で神の子イエス、救い主イエスの弟子として生まれ変わったのです。

思えば私たちの歩みも同じです。生まれた瞬間から自分の言葉で信仰告白ができる人はいません。誰もが初めはイエスさまがどのようなお方か分からず、自分の理性や常識の中で解釈しようとし、限界にぶつかったりもします。しかしそれぞれの人生で定められた時に、ふと目が開かれ、イエスさまを救い主として告白できる自分へと変えられるのです。きっかけは礼拝のメッセージかもしれませんし、祈りや讃美歌、聖書の学びの中かもしれません。どのようなものであれ、それはイエスさまが語りかけ、導いてくださっているのです。

２人の弟子は目が開かれた後、「わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合います。２人にとっては、突然イエスさまの姿が見えなくなったという奇跡よりも、「心が燃えていた」ことが、あれはイエスさまだったと確信させる鍵だったのです。バプテスマを受けている・いないに関わらず、信仰生活の中でそのように心が燃える瞬間は、折々にあることでしょう。それは、イエスさまがそばにいて下さることを深く理解するチャンスです。燃えるきっかけが誰かの言葉や祈りであったとしても、その背後におられるイエスさまへの感謝を強く表していきましょう。そして、２人の弟子が生まれ変わったように、より深くイエスさまを愛し、より熱心にイエスさまに従う者へと、日々新たにされてまいりましょう。

～分かち合い～

✧ これまでの歩みの中で、イエスさまを救い主と受け入れた瞬間や、心を燃やされた出来事について分かち合いましょう。

✧ 私たちはなぜイースターを喜び、祝うのでしょうか。その理由や意味を互いに言葉にして語り合いましょう。

（担当：郷　健人）

# 4/9―15　今週の聖書日課

**4月9日（日）**

**ルカによる福音書 24 章 13-35 節**

13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、 14 この一切の出来事について話し合っていた。 15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。 16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。 17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。 18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」 19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。 20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。 21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。 22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、 23 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。 24 仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」 25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、 26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」 27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。 29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。 30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。 31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。 32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。 33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、 34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。 35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

「心燃やされる」思い。信仰を持ち続けるために必要な要素のひとつなのではないでしょうか。私たちも聖書の御言葉、礼拝でのメッセージ、信徒同士の分ち合い、祈り、証しを通して絶えず「心燃やされる者」でありたいですね。

**4月10日（月）**

**マルコによる福音書 1 章 1-15 節**

1 神の子イエス・キリストの福音の初め。

2 預言者イザヤの書にこう書いてある。

「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、

あなたの道を準備させよう。
3 荒れ野で叫ぶ者の声がする。
『主の道を整え、
その道筋をまっすぐにせよ。』」
そのとおり、 4 洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼（バプテスマ）を宣べ
伝えた。 5 ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川
で彼から洗礼（バプテスマ）を受けた。 6 ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べて
いた。 7 彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでそ
の方の履物のひもを解く値打ちもない。 8 わたしは水であなたたちに洗礼（バプテスマ）を授けたが、その方は聖
霊で洗礼（バプテスマ）をお授けになる。」
9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼（バプテスマ）を受けられた。 10
水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。 11
すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。
12 それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した。 13 イエスは四十日間そこにとどまり、サタンか
ら誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。
14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、 15 「時は満ち、神の
国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、洗礼者ヨハネの元に行き、罪の告白をし、ヨルダン川でバプテスマを受けた。想像するだけでも大規模なリバイバル（信仰復興）が行われていました。後にイエスさま自身が「はっきり言っておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。」（マタイ 11:11a）と言われるほどの方です。そこにイエスさま自身も来られました。

**4月 11 日（火）**

**ヨハネによる福音書 21 章 1 節-14 節**

1 一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山沿いのベトファゲに来たとき、イエスは二人の弟子を使
いに出そうとして、 2 言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばがつないであり、一
緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどいて、わたしのところに引いて来なさい。 3 もし、だれ
かが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してくれる。」 4 それは、預言者
を通して言われていたことが実現するためであった。
5 「シオンの娘に告げよ。
『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、
柔和な方で、ろばに乗り、
荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」
6 弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、 7 ろばと子ろばを引いて来て、その上に服を
かけると、イエスはそれにお乗りになった。 8 大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々
は木の枝を切って道に敷いた。 9 そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。
「ダビデの子にホサナ。
主の名によって来られる方に、祝福があるように。
いと高きところにホサナ。」

10 イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒い
だ。 11 そこで群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言った。
12 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台
や鳩を売る者の腰掛けを倒された。 13 そして言われた。「こう書いてある。
『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』
ところが、あなたたちは
それを強盗の巣にしている。」
14 境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々
をいやされた。

「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」（ルカ 5:10）の場面とフラッシュバックする様な箇所です。イエスさまの弟子たちを愛する想い、弟子たちのイエスさまを慕う想いに包まれている素敵な場面ですね。

**4月 12 日（水）**

**フィリピの信徒への手紙 2 章 1-11 節**

1 そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに
慈しみや憐れみの心があるなら、2 同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、
わたしの喜びを満たしてください。3 何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互
いに相手を自分よりも優れた者と考え、4 めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払
いなさい。 5 互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。 6 キ
リストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、7 かえって自
分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、 8 へりくだって、
死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。 9 このため、神はキリストを高く上げ、あ
らゆる名にまさる名をお与えになりました。 10 こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものが
すべて、イエスの御名にひざまずき、 11 すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べ
て、父である神をたたえるのです。

「アーメン　その通りです」と言いたくなる箇所です。パウロはこの手紙をローマの獄中で書いたと言われています。フィリピの教会の方々への最後の手紙として言葉を選び、送ったのではないでしょうか。このメッセージは現代の教会にも当てはまる御言葉ですね。

**4月 13 日（木）**

**フィリピの信徒への手紙 3 章 5-12 節**

5 わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ
人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、6 熱心さの点では教会の迫害者、律
法の義については非のうちどころのない者でした。7 しかし、わたしにとって有利であったこれらの
ことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。 8 そればかりか、わたしの主キリス
ト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆ
えに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、9 キリ
ストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリスト
への信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。 10 わたしは、キリストとその

復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、 11 何とかして死者の
中からの復活に達したいのです。
12 わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。
何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。

これはパウロの証しです。「わたしには、律法から生じる（しっかり守ろうとするあまり生じてしまう）自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。」パウロだからこその言葉ですね。

**4月 14 日（金）**

**コリントの信徒への手紙一　1 章 26-31 節**

26 兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある
者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。 27 と
ころが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、
世の無力な者を選ばれました。 28 また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい
者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。 29 それは、だれ一人、神の前で誇る
ことがないようにするためです。 30 神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリ
ストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。31「誇る者は主を誇
れ」と書いてあるとおりになるためです。

「誇る者は主を誇れ」（エレミア 9:23 からの言葉と言われています）。なぜなら、弱さと愚かさを知っている人は自分ではなく主を誇るからです。

**4月 15 日（土）**

**マルコによる福音書 14 章 66-72 節**

66 ペトロが下の中庭にいたとき、大祭司に仕える女中の一人が来て、 67 ペトロが火にあたっている
のを目にすると、じっと見つめて言った。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた。」 68 しか
し、ペトロは打ち消して、「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当も
つかない」と言った。そして、出口の方へ出て行くと、鶏が鳴いた。 69 女中はペトロを見て、周り
の人々に、「この人は、あの人たちの仲間です」とまた言いだした。 70 ペトロは、再び打ち消した。
しばらくして、今度は、居合わせた人々がペトロに言った。「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガ
リラヤの者だから。」 71 すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っている
そんな人は知らない」と誓い始めた。 72 するとすぐ、鶏が再び鳴いた。ペトロは、「鶏が二度鳴く前
に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり
泣きだした。

有名な箇所です。自分の弱さを理解出来てくるほど、「私も自分の保身のために言ってしまうのだろうな」と思えるようになりました。

（担当：栗山　義亜）

## 第３課「福音を恥としない」

聖書箇所：　ローマの信徒への手紙１章 8-17 節
主題聖句：　世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。
（ルカ１：20）

今回から 11 回に亘り、「ローマの信徒への手紙」より御言葉をいただきます。
第１回目の今回は、全体のことに触れつつ、１章で語られたパウロの言葉を読んでまいりたいと思います。
パウロ書簡と言われる「ローマの信徒への手紙」の、執筆者はパウロです。
パウロが書いた７つの手紙のうちの１番最後の手紙であると言われています。
「テサロニケの信徒への第一の手紙」「コリントの信徒への第一の手紙」「コリントの信徒への第二の手紙」「ガラテヤの信徒への手紙」「フィリピの信徒への手紙」「フィレモンへの手紙」「ローマの信徒への手紙」の順番であると言われています。

年代と執筆地は、第三回伝道旅行でのコリント滞在中であると思われます。（使徒言行録 20 章 2 節～3 節）
一番最初に書かれた「テサロニケの信徒への第一の手紙」が、紀元後 50 年～51/52 年のものと様々な文献より推定されています。
「ローマの信徒への手紙」の執筆は、紀元後 55 年～56 年頃とされ、場所はコリントであると推定されます。
宛先は、ローマ在住のキリスト教徒たちに向けて書かれたものと言われています。パウロ自身が設立した教会に宛てた手紙ではない、唯一の手紙です。

この手紙の目的は、未だ訪れていない、しかし、いずれ訪問するに先立って、自己紹介と自己の神学的思想を伝えるためであったと言われています。
ほとんど面識のないローマの信徒たちの集会は、パウロが作ったものではありませんでした。
ローマ在住のユダヤ人の間にもたらされたキリスト教は、次第にユダヤ人社会周辺の異邦人たちにも及んでいったと考えられます。

パウロが未知なるローマの教会に手紙を送った動機は、パウロが異邦人伝道を志していたことから、当時異邦人社会の中心地であったローマに訪れ、福音を宣べ伝えたいと考えていたことであったと言われています。（1 章 10 節～15 節,15 章 22 節～29 節）
しかし、この当時首都ローマに多く住んでいた異邦人は、ユダヤ人に深く由来していました。したがって、神のユダヤ人への約束は不変であり、「律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです。」（7 章 12 節）と、異邦人たちにも語ります。そうすることで、神から見放されたユダヤ人たちも同時に救いに与ることになるとパウロは考えていました。（11 章 11 節～12 節）

１章にはどんなことが書かれているのでしょうか。挨拶から始まりローマ教会訪問の希望と福音宣教の希望が書かれ、律法との関連による罪の現実が書かれています。
パウロは面識のないローマ在住の信徒に向けて自己紹介も兼ねて長い挨拶をします。
ここで少し、わずかな資料によると言われていますが、パウロの情報をお伝えします。パウロは、キリキアのタルソス（現在トルコ南部の地中海に面した都市）で生まれ、ローマの市民権を持っていたベニヤミン族出身のユダヤ人でした。そして、律法遵守に厳格なファリサイ派であり、初代キリスト教徒を激しく迫害していました。ダマスコへの途上で劇的な回心を体験し、その後、最も影響力のある宣教師として特に異邦人伝道の担い手として、投獄を何度も経験しながら伝道の旅をしました。最後は 60 年代初めにローマ帝国の首都で殉教したことは、ほぼほぼ確定であろうと言われています。

１章１節～7 節を見ていきたいと思います。「キリスト・イエスの僕」と自らを紹介しますが、この「僕」は「奴隷」とも訳されますが従属や謙遜を意味せず、旧約における「預言者」等に由来します。次にパウロは自らを「使徒」と紹介します。イエスの十二弟子を思い出しますが、ここでの「使徒」は、神の働きかけ、召命によるものであり、神の福音のため

に選び出されたもの、との使徒理解をパウロは表していたと考えられます。そして自らを、異邦人のための使徒と考えていたようです。「使徒」とは決して地位や職制を表すものではありませんでした。

5 節の「御名を広め」は、御子イエスを内容とする福音宣教のことであると思われます。「信仰による従順」は、倫理的意味はなく福音に立った、最後まで揺るがぬ強い信仰の歩みのことで、「異邦人」とは、神の民イスラエル以外の諸民族の総称であると考えられます。
7 節の「神に愛され、召されて聖なる者となった」は、神に選ばれた者という意味で、ここではキリスト教の信徒を指し、神の前に立つことが許された者、神の前に立つにふさわしい者という状態を意味します。

次に今回の聖書箇所である 1 章 8 節～17 節を見ていきたいと思います。
手紙の本文となる書き出しは、神に対する「感謝」の言葉から始まります。その内容は形式的な挨拶に終わらせず、具体的な関心事を簡潔にしかし熱心に心を込めて語っています。
「わたしの神」が、旧約の表現であるのに対して、「イエス・キリストを通して」という付加された言葉は、神との新しい関係性を示唆していると言われます。
パウロにとっての神との関係性が、常にイエス・キリストを仲介者としていたことによると思われます。しかしこのことは、神との隔たりではなく最も近くに引き寄せられた「わたしの神」との関係であると思われます。
「感謝」の内容は、ローマのキリスト教徒の信仰が全世界に伝えられているということに対してのものです。なぜなら、ローマはすべての道が通じる帝国の首都であり、全世界の中心地として、地の果てまで福音が宣べ伝えられていく出発点としての役割を担っているからです。

パウロの異邦人伝道の使徒としての最大の関心事は、ローマに行きそこから地の果てまで伝道することでした。「何とかしていつかは神の御心によって」と、ローマ行きを強い熱情をもって、強い祈りを神さまにお捧げしていたことがわかります。そしてこの祈りはパウロからの一方的な祈りではなく、「あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。」と熱望します。
パウロのローマへの伝道の必然性は、「兄弟たち」という呼びかけから聴衆たちの注意喚起をしつつ、「今日まで妨げられているのです。」と具体的に、しかし配慮しつつ、成功を期待するお願いとして強く語られています。

「わたしは福音を恥としない。」は、告白の響きを持つ宣言でもあり、ここでの福音とは、「十字架の言葉」「神の力」であり、伝承や教義の受容に留まることなく、生きた神の言葉として実現するものであると語られます。

1 章 18 節～32 節では、人間の罪について書かれています。20 節から私たちは最も大切なメッセージを受け取ることになると思います。「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って彼らには弁解の余地がありません。」は、神は初めから変わることなく人間に対してその関係性を持ち続けておられ、ユダヤ人も関係性は切れることなく、異邦人に対しても神はその業を表され、神の救いのご計画の中に置かれていることを表します。
福音の到来に一点の曇りもなく従う時、人間の罪は神の義において赦されるのではないでしょうか。

現代において、伝道の難しさは困難を極めていると言わざるを得ません。いつの時代の背景も、伝道する者にとっては自身の信仰との対峙であると思います。しかし、そこに神の御手は確かに変わらず差し出されていることに感謝し、パウロの熱く燃える伝道の思いを、まだ神さまに出会っていない人々に届けていきたいと思わされました。

～分かち合い～

✧ 伝道と聞いた時、皆さまはどのような方法があると思われますか？

（担当：岩崎　秀子）

# 4/16―22　今週の聖書日課

**4月16日（日）**

**ローマの信徒への手紙 1章 8-17節**

8まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。 9わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださることですが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、 10何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。 11あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。 12あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。 13兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。 14わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。 15それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

16わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。 17福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

12節に「あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。」パウロはローマにも行って福音宣教と励ましあいをしたいと願っています。私たちはコロナが鎮まりつつあり、顔と顔を合わせてお話をしたり、証をしあったり、お祈りをしたり、神さまをお伝えしたり、何よりも共に礼拝を守れます幸いを感謝いたします。世界に遣わされて宣教しておられる方々のお働きが豊かに祝福されます様にお祈りいたします。

**4月17日（月）**

**コリントの信徒への手紙一　12章 1-12節**

1兄弟たち、霊的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。 2あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。 3ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。

4賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。 5務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。 6働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。 7一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。 8ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、 9ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、 10ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。 11これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

12体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、

キリストの場合も同様である。

一人一人に“霊”の働き「賜物」が現れるのは、全体の益となるためですとあります。例えばですが、私たちには自分の考えの枠にはまらない大きな祝福の技が起こると怪しんで認め無かったり、羨んだり、又そのような奇跡の賜物を持つ人を仲間と認めないようなところがないでしょうか？どんなに小さな(大きな)事でも一人一人の賜物が用いられ実現する時に、主に感謝し受け入れ合うことで祝福がいく倍にも増し福音が広がるのではないでしょうか。

**4月18日（火）**

**マルコによる福音書２章13節-17節**

13 イエスは、再び湖のほとりに出て行かれた。群衆が皆そばに集まって来たので、イエスは教えられ
た。 14 そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従
いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。 15 イエスがレビの家で食事の席に着い
ておられたときのことである。多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に大勢
の人がいて、イエスに従っていたのである。 16 ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人
と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」
と言った。 17 イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人であ
る。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

レビの家に集まった人々は自分の(パリサイ人の様には律法を守れないと言う)罪を知っていた人々で、傲慢・自己義認とは正反対の人々でした。麗しい主とのご慈愛に満ちた食事会が目に浮かんできます。「正しい人はいない、一人もいない。」ローマ 3:10　実はイエスさまと徴税人達を罪人と決めつけていたパリサイ人自身も、悔い改めの必要な罪人だったのです。私達も罪赦された罪人として錯覚しないで、日々悔い改めをして主に従って参りたいです。

**4月19日（水）**

**マルコによる福音書３章1-6節**

1 イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。 2 人々はイエスを訴えようと
思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。 3 イエスは手の萎えた人に、
「真ん中に立ちなさい」と言われた。 4 そして人々にこう言われた。「安息日に律法で許されている
のは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」彼らは黙っていた。 5 そ
こで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばし
なさい」と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。 6 ファリサイ派の人々は出て行き、早速、
ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。

罠を仕掛けられているようなイエスさまですが、安息日の律法を文字上だけで守ろうとして自身の身の安全・安心を求め、悩んでいる人々を助けることを避けてしまうような保身にまわることはできませんでした。 私たちのために身を挺して下さるご愛に、そして律法厳守よりも私達一人一人の〈いのちを救うこと・必要〉に目を留めていて下さる主に心より感謝いたします。

**4月20日（木）**

**詩編36編1-13節**

1 【指揮者によって。主の僕の詩。ダビデの詩。】
2 神に逆らう者に罪が語りかけるのが

わたしの心の奥に聞こえる。
彼の前に、神への恐れはない。
3 自分の目に自分を偽っているから
自分の悪を認めることも
それを憎むこともできない。
4 彼の口が語ることは悪事、欺き。
決して目覚めようとも、善を行おうともしない。
5 床の上でも悪事を謀り
常にその身を不正な道に置き
悪を退けようとしない。
6 主よ、あなたの慈しみは天に
あなたの真実は大空に満ちている。
7 恵みの御業は神の山々のよう
あなたの裁きは大いなる深淵。
主よ、あなたは人をも獣をも救われる。
8 神よ、慈しみはいかに貴いことか。
あなたの翼の陰に人の子らは身を寄せ
9 あなたの家に滴る恵みに潤い
あなたの甘美な流れに渇きを癒す。
10 命の泉はあなたにあり
あなたの光に、わたしたちは光を見る。
11 あなたを知る人の上に
慈しみが常にありますように。
心のまっすぐな人の上に
恵みの御業が常にありますように。
12 神に逆らう者の手が
わたしを追い立てることを許さず
驕る者の足が
わたしに迫ることを許さないでください。
13 悪事を働く者は必ず倒れる。
彼らは打ち倒され
再び立ち上がることはない。

「命の泉」「光」よりイエスさまの受肉にも思いを馳せ、賛美と感謝のお祈りを捧げる時にこのままの文章をお祈りしたいと思わされました。アーメンです。最後に詩人は神を知ることが「慈しみ」と「恵み」を絶えず与えられる事であり、そのような人々が悪者から守られますようにと祈ります。私達も献身者・友人・家族・自分のためにこの様にお祈りしたいです。

**4月21日（金）**

**マタイによる福音書　6章25-34節**

25「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで
何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。 26 空
の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父
は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。 27 あなたがたのうちだ
れが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。 28 なぜ、衣服のこと
で思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。 29
しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。
30 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まし

て、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。 31 だから、『何を食べよう
か』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。 32 それはみな、異邦人が切に求めて
いるものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。
33 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられ
る。 34 だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、
その日だけで十分である。」

(私にとっては)目一杯と思われるスケジュールが組まれてしまっている時に大きな助けを求められ、「これ以上心身が持ちません！」と一瞬パニックになりそうになりました。借りていた主人の部屋から出ようとふりむきましたら「信仰告白:明日を思い煩うな、一番大切なものはただ一つだけである。先ず、神の国とその義とを求めよ。・・・」と壁に貼ってありました。
(ああ! 主よ、そうでしたね)と平安をいただき、必要を満たして下さる万軍の主に祈るという基本に帰れて感謝でした。

**4月22日（土）**

**ルカによる福音書 18 章 9-17 節**

9 自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話
された。 10 「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人
だった。 11 ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たち
のように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないこと
を感謝します。 12 わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』 13 ところが、徴
税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを
憐れんでください。』 14 言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサ
イ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」
子供を祝福する
15 イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。弟子たちは、これを見て叱
った。 16 しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところに来
させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。 17 はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

若い時クラスで「私たち人間はどんなに立派な人でも、そうでないと見える人でも、神さまの前にはどんぐりの背比べで何も変わらず同じ愛される人です。」と学びました。社会生活の秩序を守る上で礼儀はとても大切で守る必要がありますが、年を重ねても神さまの前では小さな子供が親にそうする様に、苦しい時には主に助けを求め、人々の救いを願い、嬉しい時には喜びを感謝や賛美で素直にあらわして参りたいです。

（担当：渡部　和子）

## 第４課「正しい者は一人もいない」

聖書箇所：　ローマの信徒への手紙３章 9-20 節
主題聖句：　なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。
（ローマ３：20）

ローマの信徒への手紙 3 章の冒頭で、パウロは、ユダヤ人の優れた点について書いています。それは、神の言葉を委ねられたことだと述べています。

ユダヤ人たちは、自分たちは神に選ばれた民、特別な恵みを受けている民だと考えていました。十戒を中心とする律法が与えられ、預言者たちを通して神の言葉が語られ、イスラエルの歴史は神に導かれてきたからです。神の言葉を委ねられた者には、それに応える責任が生じます。しかし、ユダヤ人は正しく応答せず、自分たちは優れているのだと言って、他の民族を見下していました。羊の世話で安息日を守れない羊飼いたちは、神さまから見放された人として、社会の片隅に追いやられていました。人の行動を監視して、安息日にしてはいけないとされていることをした人を見つけては非難しました。律法は神さまから与えられたみ言葉であったのに、いつしか、人間のもの、肉のものとなってしまったのです。

パウロ自身もそうでした。パウロは熱心なユダヤ教徒で、律法を固く守り、守らない人を迫害していました。そのため、イエス・キリストを信じるキリスト教徒からは恐れられていました。しかし、ダマスコへ向かう途中、主イエスの声を聞いたパウロは、主イエスこそが神の子であることを信じるようになり、律法ではなく、信仰により救われることを信じるクリスチャンへと生まれ変わったのです。

パウロは、ユダヤ人に優れた点は全くないと言います。それどころか、罪の下にあるという点で、ユダヤ人も異邦人も同じであると言います。「罪」は「的外れ」を意味します。神さまを見上げず、人と比較し、優越感に浸って人を裁いてしまう私たちは、みな同じように罪の下にあるのです。

10 節～18 節は旧約聖書からの引用です。

神を知らぬ者は心に言う
「神などない」と.
人々は腐敗している。
忌むべき行いをする。
善を行う者はいない。（詩編 14 篇 1～3 編）

この箇所をはじめ、コヘレト、詩編、イザヤ書、箴言の言葉を引用して、ユダヤ人もギリシア人も同じように罪人であると言います。「彼らは舌で人を欺き」、「彼らは平和の道を知

らない」、「彼らの目には神への畏れがない」など、ここに書かれている罪深い人間の姿は、現代の私たちにそっくりです。いじめや様々なハラスメント、繰り返される戦争や犯罪、神を畏れず、自分が神であるかのように錯覚して、国民を意のままに動かそうとする国のリーダーたち。2023 年の今も、私たちは変わらず、罪を繰り返しています。

人は、律法を守ることによって救われるのではなく、ただ、神さまの恵みにより、神さまを信じる信仰により救われます。

それでは、なぜ、神さまは律法をお与えになったのでしょうか?
それは、律法によって、罪の自覚を生じさせるためだとパウロは語ります。

律法を正しく理解し、正しく行おうとすればするほど、人の罪深さに気づきます。律法に従って、すべて正しく行うことは不可能だからです。そして、悔い改め、神さまの恵みを求める信仰によってのみ救われることを知るのです。

このことに、ユダヤ人も異邦人も関係ありません。
性別、身分、仕事も関係ありません。

神さまによってこの世に送り出され、生かされている私たち。
正しい者は一人もいませんが、救われない人も一人もいないのです。

私たちが神さまを愛したのではなく、神さまが私たちを愛して、御子を遣わしてくださいました。
私たちが何かをするから、神さまは私たちに恵みを注いでくださるのではありません。神さまが注いでくださる恵みに感謝して、応答していくのが私たちのあるべき姿です。

主の前にへりくだり、悔い改めさせていただき、主のみ救いにあずかれる幸いに感謝して歩んでまいりましょう。

〜分かち合い〜
✧ 悔い改めても、繰り返し罪をおかす私たち人間は、どのように神さまに向き合えばよいでしょうか？
✧ パウロのように、考え方が 180 度変わるような経験をしたことがありますか？

（担当：田中　由記子）

# 4/23―29　今週の聖書日課

**4月23日（日）**

**ローマの信徒への手紙３章9-20節**

9では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。 10次のように書いてあるとおりです。
「正しい者はいない。一人もいない。
11悟る者もなく、
神を探し求める者もいない。
12皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。
善を行う者はいない。
ただの一人もいない。
13彼らののどは開いた墓のようであり、
彼らは舌で人を欺き、
その唇には蝮の毒がある。
14口は、呪いと苦味で満ち、
15足は血を流すのに速く、
16その道には破壊と悲惨がある。
17彼らは平和の道を知らない。
18彼らの目には神への畏れがない。」
19さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するようになるためなのです。 20なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。

| |
|---|
| その道には破壊と悲惨がある。彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない。愚かなる人の心にはサタンが住み着いています。まるで、今の世界の現状を言っているようです。神さまはご自分にかたどって人をつくられました。人の心の奥には神さまと同じ「愛」が宿っています。だから、神さまは愚かな行いをしている私たちでも信じて下さいます。愛して下さいます。神さま、感謝致します。 |

**4月24日（月）**

**ヨハネ福音書８章1-11節**

1イエスはオリーブ山へ行かれた。 2朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。 3そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、 4イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。 5こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」 6イエスを試して、訴える口実を得るため

に、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。 7しかし、彼らが
しつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことのな
い者が、まず、この女に石を投げなさい。」 8そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。 9
これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真
ん中にいた女が残った。 10イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるの
か。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」 11女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われ
た。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」〕

「あなたたちの中で罪を犯したことのないものが、まずこの女に石を投げなさい」そう言われたら、心の中に過去の罪を思いかえされます。私も石を投げられません。律法学者もファリサイ派もいなくなりました。皆自分の心を見て「罪を犯したことがある」と、わかったのですね。

**4月25日（火）**

**コリントの信徒への手紙一　8章1節-13節**

1偶像に供えられた肉について言えば、「我々は皆、知識を持っている」ということは確かです。ただ、知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる。 2自分は何か知っていると思う人がいたら、その人は、知らねばならぬことをまだ知らないのです。 3しかし、神を愛する人がいれば、その人は神に知られているのです。 4そこで、偶像に供えられた肉を食べることについてですが、世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もいないことを、わたしたちは知っています。
5現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものがいても、 6わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。
7しかし、この知識がだれにでもあるわけではありません。ある人たちは、今までの偶像になじんできた習慣にとらわれて、肉を食べる際に、それが偶像に供えられた肉だということが念頭から去らず、良心が弱いために汚されるのです。 8わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありません。食べないからといって、何かを失うわけではなく、食べたからといって、何かを得るわけではありません。 9ただ、あなたがたのこの自由な態度が、弱い人々を罪に誘うことにならないように、気をつけなさい。 10知識を持っているあなたが偶像の神殿で食事の席に着いているのを、だれかが見ると、その人は弱いのに、その良心が強められて、偶像に供えられたものを食べるようにならないだろうか。 11そうなると、あなたの知識によって、弱い人が滅びてしまいます。その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです。 12このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるのは、キリストに対して罪を犯すことなのです。 13それだから、食物のことがわたしの兄弟をつまずかせるくらいなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません。

偶像に供えられた肉を食べても、偶像は唯一の神さまではありませんから問題はありません。しかし他の神に加担したとか、あなたは汚れたとか言う人がいるかもしれません。ただ唯一の神さまを信じて祈りましょう。そんな言葉は気にならなくなります。

**4月26日（水）**

**詩編14編　1-7節**

1【指揮者によって。ダビデの詩。】
神を知らぬ者は心に言う
「神などない」と。
人々は腐敗している。
忌むべき行いをする。
善を行う者はいない。
2主は天から人の子らを見渡し、探される
目覚めた人、神を求める人はいないか、と。
3だれもかれも背き去った。
皆ともに、汚れている。
善を行う者はいない。ひとりもいない。
4悪を行う者は知っているはずではないか。
パンを食らうかのようにわたしの民を食らい
主を呼び求めることをしない者よ。
5そのゆえにこそ、大いに恐れるがよい。
神は従う人々の群れにいます。
6貧しい人の計らいをお前たちが挫折させても
主は必ず、避けどころとなってくださる。
7どうか、イスラエルの救いが
シオンから起こるように。
主が御自分の民、捕われ人を連れ帰られるとき
ヤコブは喜び躍り
イスラエルは喜び祝うであろう。

現実の世界を目にすると権力者がのさばり、弱き者は苦しんでいます。災害が起こり多くの人がなくなり悲しんでいます。悲惨な現状を見て「神などいない」と言うかもしれません。しかし、神を信じる人々の群れに神さまはおられます。心の中に希望の光となって、おられます。

**4月27日（木）**

**イザヤ書59章1-21節**

1主の手が短くて救えないのではない。
主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。
2むしろお前たちの悪が
神とお前たちとの間を隔て
お前たちの罪が神の御顔を隠させ
お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ。
3お前たちの手は血で、指は悪によって汚れ
唇は偽りを語り、舌は悪事をつぶやく。
4正しい訴えをする者はなく
真実をもって弁護する者もない。
むなしいことを頼みとし、偽って語り
労苦をはらみ、災いを産む。
5彼らは蝮の卵をかえし、くもの糸を織る。
その卵を食べる者は死に
卵をつぶせば、毒蛇が飛び出す。
6くもの糸は着物にならず
その織物で身を覆うことはできない。

彼らの織物は災いの織物
その手には不法の業がある。
7 彼らの足は悪に走り
罪のない者の血を流そうと急ぐ。
彼らの計画は災いの計画。
破壊と崩壊がその道にある。
8 彼らは平和の道を知らず
その歩む道には裁きがない。
彼らは自分の道を曲げ
その道を歩む者はだれも平和を知らない。
9 それゆえ、正義はわたしたちを遠く離れ
恵みの業はわたしたちに追いつかない。
わたしたちは光を望んだが、見よ、闇に閉ざされ
輝きを望んだが、暗黒の中を歩いている。
10 盲人のように壁を手探りし
目をもたない人のように手探りする。
真昼にも夕暮れ時のようにつまずき
死人のように暗闇に包まれる。
11 わたしたちは皆、熊のようにうなり
鳩のような声を立てる。
正義を望んだが、それはなかった。
救いを望んだが、わたしたちを遠く去った。
12 御前に、わたしたちの背きの罪は重く
わたしたち自身の罪が不利な証言をする。
背きの罪はわたしたちと共にあり
わたしたちは自分の咎を知っている。
13 主に対して偽り背き
わたしたちの神から離れ去り
虐げと裏切りを謀り
偽りの言葉を心に抱き、また、つぶやく。
14 こうして、正義は退き、恵みの業は遠くに立つ。
まことは広場でよろめき
正しいことは通ることもできない。
15 まことは失われ、悪を避ける者も奪い去られる。
主は正義の行われていないことを見られた。
それは主の御目に悪と映った。
16 主は人ひとりいないのを見
執り成す人がいないのを驚かれた。
主の救いは主の御腕により
主を支えるのは主の恵みの御業。
17 主は恵みの御業を鎧としてまとい
救いを兜としてかぶり、報復を衣としてまとい
熱情を上着として身を包まれた。
18 主は人の業に従って報い
刃向かう者の仇に憤りを表し
敵に報い、島々に報いを返される。
19 西では主の御名を畏れ
東では主の栄光を畏れる。
主は激しい流れのように臨み
主の霊がその上を吹く。
20 主は贖う者として、シオンに来られる。

ヤコブのうちの罪を悔いる者のもとに来ると
主は言われる。
21 これは、わたしが彼らと結ぶ契約であると
主は言われる。
あなたの上にあるわたしの霊
あなたの口においたわたしの言葉は
あなたの口からも、あなたの子孫の口からも
あなたの子孫の子孫の口からも
今も、そしてとこしえに
離れることはない、と主は言われる。

主はあなたを見ているのに、あなたを思っているのに、あなたの心のサタンが間を隔てています。主に対して偽り、裏切り、背き、子供の反抗期のように不信感を持っています。でも主は言われます。「今も、そして、とこしえに私はあなたからはなれることはない」と

**4月28日（金）**

**ガラテヤの信徒への手紙　2章11-21節**

11 さて、ケファがアンティオキアに来たとき、非難すべきところがあったので、わたしは面と向かって反対しました。 12 なぜなら、ケファは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとしだしたからです。 13 そして、ほかのユダヤ人も、ケファと一緒にこのような心にもないことを行い、バルナバさえも彼らの見せかけの行いに引きずり込まれてしまいました。 14 しかし、わたしは、彼らが福音の真理にのっとってまっすぐ歩いていないのを見たとき、皆の前でケファに向かってこう言いました。「あなたはユダヤ人でありながら、ユダヤ人らしい生き方をしないで、異邦人のように生活しているのに、どうして異邦人にユダヤ人のように生活することを強要するのですか。」

すべての人は信仰によって義とされる

15 わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。 16 けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。 17 もしわたしたちが、キリストによって義とされるように努めながら、自分自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者ということになるのでしょうか。決してそうではない。 18 もし自分で打ち壊したものを再び建てるとすれば、わたしは自分が違犯者であると証明することになります。 19 わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。 20 生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。 21 わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

パウロは言います。「キリストが私の内に生きておられます。私が今、生きているのは私を愛し、私のために身をささげられた神の子(イエスさま)に対する信仰によるものです」パウロのイエスさまへの信仰の強さを思います。私もパウロにはとてもおよびませんが、思います。

**4月29日（土）**

**コリントの信徒への手紙二　5章14-21節**

14 なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります。 15 その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。
16 それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。 17 だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。 18 これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。 19 つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。 20 ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。 21 罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

「キリストと結ばれる人は新しく創造されたものなのです。神はキリストをとおして私たちをご自分(神)と和解させ、和解のための奉仕する任務をお授けになりました。私たちはキリストの使者の務めを果たしています」イエスさまに喜ばれる行いをしましょう。共に繋がり、分かち合い、祈り合いましょう。イエスさまの愛に一人でも多くの人が触れられますように。みことばをのべ伝えましょう。

（担当：小沢　敬一）

# 第５課「神の恵みによる義」

聖書箇所：　ローマの信徒への手紙３章 21-31 節
主題聖句：　人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、
信仰によると考えるからです。（ローマ３：28）

今週の聖書教育誌の週題は「神の恵みによる義」です。
ローマ信徒への手紙は使徒となったパウロが第三回伝道旅行のなかで立ち寄ったコリントで、まだ見ぬローマの教会あるいは教会の群れの人たちに向けて紀元 56 年ころに書かれました。ローマの教会がいつ誰が始めたかはよく分かっていません。使徒言行録 2 章にローマから来て滞在中の者という記載があるので彼らがローマの福音の礎となったのかもしれません。パウロ自身は当時の世界の中心都市であるローマに一度は訪れて福音を宣べ伝えたいと熱く祈り求めていました。

聖書箇所は「信仰義認」についてパウロが解き明かしている箇所となります。

**ローマ 3:22**

**イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。**

人は信仰により恵みの賜物を受けるのであって、自分の働きによって受けるものではないことを語るのです。それは当時のユダヤの人たちには簡単なことではありませんでした。出エジプト以来、約束の地に帰った後、彼らは国が滅び、捕囚の民となっても旧約聖書からの律法を守ることで民族の存立を果たしてきました。
しかし、律法を守り通すことは容易なことではありません。結果として律法を守れず神の救いの希望を失った人々がいました。例えば、イエス様の誕生の時に真っ先に知らされた羊飼いたちは救いから見放された存在だと彼ら自身もあきらめていたのでした。
使徒となったパウロは、以前はファリサイ派に属し学識も豊かで、家柄も良い環境に育った人です。当時の特権階級の人しか与えられなかった「ローマ市民権」を持った人でした。

**フィリピ 3:6**

**熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。**

その律法に熱心であったパウロがダマスコ途上でイエス・キリストに出会い回心します。パウロの回心は律法による生き方への決別でした。彼はキリストとの出会いから律法による生き方は、つまるところ人間の力、すなわち自分自身の行いによる神への忠節により救いを受けることに他ならないことに気づかされたのです。
律法を守る生活は、いつしか人が主人公で律法を守るか否むかを決まるようになりました。神は隅に追いやられ、ただ人の行いの結果に対して祝福したりする存在にしていたことにパウロは神により告げられ回心したのです。

**ガラテヤ 1:15～16**

**わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされた**

パウロは、神が御子イエス・キリストをダマスコ途上の出来事により歴史に介入されたことにより、律法から解放され「神の義」すなわち「福音」を説く者とされたのです。

**ローマ 3:21**

**ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。**

「神の義」は難しい言葉でもあります。「福音」ですべて言い表しているとも言えません。「神の痛みの神学」を説いた北森嘉造先生は「神の義」とは「神の神たるゆえん」であると説きました。

**ローマ 3:23～24**

**人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。**

人は律法の行いによって救われるのではなく神の恵みにより無償で義とされるという、このみ言葉はただイエス様を信じる信仰により、人は父なる神と和解が赦され救われるという「福音」が告げられます。

**ローマ 3:30**

**実に、神は唯一だからです。この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によって義としてくださるのです。**

この神の救いの宣言はユダヤ人やギリシャ人だけでなく、全ての異邦人、すなわち私たちにもイエス様を信じる信仰により救われるのです。今、ポスト・コロナの時を迎えつつあります。三年の月日は私たちにとり決して無駄な時間ではありませんでした。それぞれが自分を見つめ直し、生き方を考えた時でもありました。私たちはより聖書に向き合う時となったのではないでしょうか。

常盤台教会では多くの方がバプテスマ・転入会され、さらに希望される方が多くおられます。そのために先に救われた私たちがその方々と伴走者として寄り添う働きも起こされています。そのような中で「律法」と「福音」について学ぶ大切さを改めて覚えたことは感謝なことです。

**ローマ 3:31**

**それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです。**

律法は私たちにとって無用なのでしょうか。そんなことはありません。律法によってこそ私たちは神に対する罪というものを自覚できるのです。律法中心の生き方から解放された私たちはイエス様の示された「神の恵みによる義・福音」によって「律法」を真に守る者へと変えられていくのです。

**マタイ 5:17 ～18**

**「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。」**

～分かち合い～

✧ 決められたことを守ることは一見して楽のように思いますが、あなたはどう思われますか。

✧ 「ただ信ぜよ」と言われたら、なんと応えますか

（担当：郷　秀男）

# 4/30―5/6　今週の聖書日課

**4月30日（日）**

**ローマの信徒への手紙３章21-31節**

21 ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。 22 すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。
そこには何の差別もありません。 23 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、
24 ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。 25 神
はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、
今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。 26 このように神は忍耐してこら
れたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる
者を義となさるためです。
27 では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則
によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。 28 なぜなら、わたしたちは、人が義とされ
るのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。 29 それとも、神はユダヤ人だ
けの神でしょうか。異邦人の神でもないのですか。そうです。異邦人の神でもあります。 30 実に、
神は唯一だからです。この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によっ
て義としてくださるのです。 31 それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決し
てそうではない。むしろ、律法を確立するのです。

① イエスさまが私たちと同じ人となり、私たちの罪のため十字架の裁きを受けてくださった。
② この贖いの死による神の愛は無償である。
③ 神が御子イエスキリストによって成し遂げた救いをただ感謝して受け入れればよい。私たちにできることは神を礼拝し、み言葉に聞き、祈り、神に喜ばれる生活をしていくことです。

**5月1日（月）**

**創世記１章1-27節**

1 初めに、神は天地を創造された。 2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動
いていた。 3 神は言われた。
「光あれ。」
こうして、光があった。 4 神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、 5 光を昼と呼び、闇
を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。
6 神は言われた。
「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」
7 神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。 8 神は大空を天
と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。
9 神は言われた。
「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」
そのようになった。 10 神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、

良しとされた。 11 神は言われた。
「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」
そのようになった。 12 地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。 13 夕べがあり、朝があった。第三の日である。
14 神は言われた。
「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。 15 天の大空に光る物があって、地を照らせ。」
そのようになった。 16 神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。 17 神はそれらを天の大空に置いて、地を照らさせ、 18 昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。 19 夕べがあり、朝があった。第四の日である。
20 神は言われた。
「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」
21 神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。 22 神はそれらのものを祝福して言われた。
「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」
23 夕べがあり、朝があった。第五の日である。
24 神は言われた。「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」
そのようになった。 25 神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。 26 神は言われた。
「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」
27 神は御自分にかたどって人を創造された。
神にかたどって創造された。
男と女に創造された。

「神は言われた」「そのようになった」「良しとされた」混沌とした状態から「良し」とされていく過程がわかります。すべては最初から完成されたものとして造られたのではなく、神さまの創造は混沌から始まり、その終わりは極めてよかったとされる完成形です。

**5 月 2 日（火）**

**使徒言行録 13 章 33-42 節**

33 つまり、神はイエスを復活させて、わたしたち子孫のためにその約束を果たしてくださったのです。それは詩編の第二編にも、
『あなたはわたしの子、
わたしは今日あなたを産んだ』

と書いてあるとおりです。 34また、イエスを死者の中から復活させ、もはや朽ち果てることがない
ようになさったことについては、
『わたしは、ダビデに約束した
聖なる、確かな祝福をあなたたちに与える』
と言っておられます。 35ですから、ほかの個所にも、
『あなたは、あなたの聖なる者を
朽ち果てるままにしてはおかれない』
と言われています。 36ダビデは、彼の時代に神の計画に仕えた後、眠りについて、祖先の列に加え
られ、朽ち果てました。 37しかし、神が復活させたこの方は、朽ち果てることがなかったのです。
38だから、兄弟たち、知っていただきたい。この方による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたが
たがモーセの律法では義とされえなかったのに、 39信じる者は皆、この方によって義とされるので
す。 40それで、預言者の書に言われていることが起こらないように、警戒しなさい。
41『見よ、侮る者よ、驚け。滅び去れ。
わたしは、お前たちの時代に一つの事を行う。
人が詳しく説明しても、
お前たちにはとうてい信じられない事を。』」
42パウロとバルナバが会堂を出るとき、人々は次の安息日にも同じことを話してくれるようにと頼
んだ。

| |
|---|
| アンティオキヤ教会でのパウロの宣教は、厳しい表現で罪を指摘しているように取れますが、パウロ流の励ましと考えられます。パウロはちゃんと罪の赦しと罪を赦された後の本当の祝福についても語っています。私たちもみ言葉によって朽ちることのないキリストに出会うことができると約束されています。 |

**5月3日（水）**

**マルコによる福音書　5章1-20節**

1一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。 2イエスが舟から上がられるとすぐに、汚
れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。 3この人は墓場を住まいとしており、もはやだれ
も、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。 4これまでにも度々足枷や鎖で縛られ
たが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。 5
彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。 6イエスを遠くから見る
と、走り寄ってひれ伏し、 7大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だか
ら、苦しめないでほしい。」 8イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。
9そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言っ
た。 10そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。 11ところ
で、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。 12汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り
込み、乗り移らせてくれ」と願った。 13イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の
中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死
んだ。 14豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来

た。 15彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座
っているのを見て、恐ろしくなった。 16成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身
に起こったことと豚のことを人々に語った。 17そこで、人々はイエスにその地方から出て行っても
らいたいと言いだした。 18イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きた
いと願った。 19イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の
人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」 20その人は
立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々
は皆驚いた。

多数の悪霊に取りつかれた人は人格が破壊され暴力的で自虐的、墓を住処とするほど絶望的な様子です。しかし主イエスはその人を悪霊から解放します。正気になったその人はお供をしたいと願い出ますが家に帰って証しをするように命じられました。彼が主の癒しを言い広めなければ、もしかすると私たちも主イエスのことを知ることがなかったかもしれません。

**5月4日（木）**

**使徒言行録 15章 1-11節**

1 ある人々がユダヤから下って来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救
われない」と兄弟たちに教えていた。 2 それで、パウロやバルナバとその人たちとの間に、激しい
意見の対立と論争が生じた。この件について使徒や長老たちと協議するために、パウロとバルナバ、
そのほか数名の者がエルサレムへ上ることに決まった。 3 さて、一行は教会の人々から送り出され
て、フェニキアとサマリア地方を通り、道すがら、兄弟たちに異邦人が改宗した次第を詳しく伝え、
皆を大いに喜ばせた。 4 エルサレムに到着すると、彼らは教会の人々、使徒たち、長老たちに歓迎
され、神が自分たちと共にいて行われたことを、ことごとく報告した。 5 ところが、ファリサイ派
から信者になった人が数名立って、「異邦人にも割礼を受けさせて、モーセの律法を守るように命じ
るべきだ」と言った。
6 そこで、使徒たちと長老たちは、この問題について協議するために集まった。 7 議論を重ねた後、
ペトロが立って彼らに言った。「兄弟たち、ご存じのとおり、ずっと以前に、神はあなたがたの間で
わたしをお選びになりました。それは、異邦人が、わたしの口から福音の言葉を聞いて信じるように
なるためです。 8 人の心をお見通しになる神は、わたしたちに与えてくださったように異邦人にも
聖霊を与えて、彼らをも受け入れられたことを証明なさったのです。 9 また、彼らの心を信仰によ
って清め、わたしたちと彼らとの間に何の差別をもなさいませんでした。 10それなのに、なぜ今あ
なたがたは、先祖もわたしたちも負いきれなかった軛を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みよう
とするのですか。 11わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これ
は、彼ら異邦人も同じことです。」

「異邦人は割礼を受けないと救われない、異邦人信者はモーセの律法に従って生きるべきか、」という意見にペトロは「神は異邦人にも聖霊を降したのだから、割礼を強要することは神を試みることになる。」と反論します。国や時代を超えてすべての人は、主イエスの恵みによって罪の束縛から解放され、救われることを神さまは約束してくださっています。

**5月5日（金）**

**コリントの信徒への手紙一　13章1-11節**

1たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。 2たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。 3全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

4愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。 5礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。 6不義を喜ばず、真実を喜ぶ。 7すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

8愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、 9わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。 10完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。 11幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。

パウロがコリント教会に宛てた手紙の一部です。コリント教会は様々な混乱があり非道徳や不品行が入り込みキリストの教会としてのしるしを失っていました。「神さまからいただいた賜物だけ持っていても愛がないなら何の役にも立ちません。」パウロの語る愛とはロマンチックなものとは違い、キリストが生涯をかけて示した神の愛のことです。

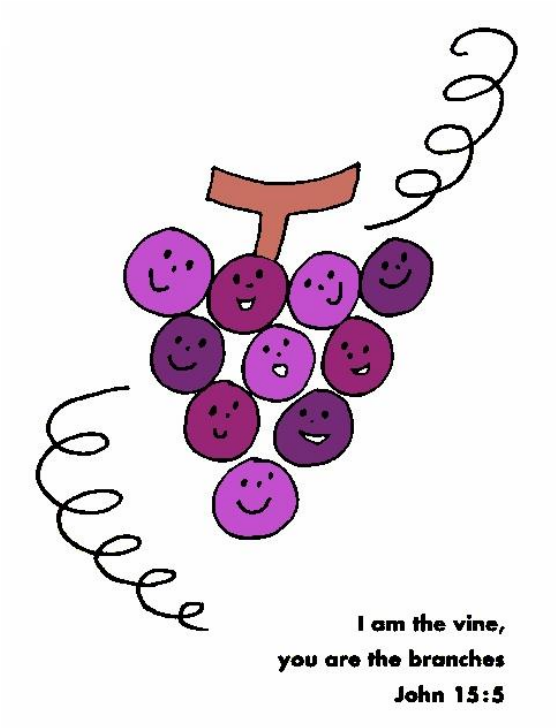
**5月6日（土）**

**マタイによる福音書11章25-30節**

25そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。 26そうです、父よ、これは御心に適うことでした。 27すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。 28疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。 29わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。 30わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」25そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。 26そうです、父よ、これは御心に適うことでした。 27すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。 28疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。 29わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。 30わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

イエスさまはすべての人を招いておられます。「疲れている人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。」安息を約束してくださっています。あなたは今、どんな重荷を負って苦しんでいますか。主の安息への招待状はあなたにも差し出されています。わたしが重荷を一緒に担おうと言ってくださる主。そして私たちも主の重荷を一緒に担わせていただきましょう。

（担当：宇佐美　典子）




2023.4 成人科